

【シンポジウム】

古代ギリシアにおける市民と戦争 ——市民の立場から、ウクライナ侵攻に抗して——

隠岐-須賀 麻衣

目 次

はじめに

1 戦争と向き合う三つの方法

2 古代ギリシアにおける戦争, 政治, 演劇

3 戦争と喜劇

おわりに

要旨

2022年2月に始まったロシア軍によるウクライナ侵攻は、未だ出口の見えない状況である。本報告の目的は、国際情勢に直接的な影響を与えている政治学上のアクター（国家や国際機関）とは異なる次元、すなわち、市民の視点からウクライナ侵攻やその延長線上にある問題を考えるための方法を探るものである。ここではそのヒントを古代ギリシアに求め、そこで市民がいかにして戦争と向き合っていたのかを明らかにする。

はじめに

6595人、2383人、61人。これはそれぞれ、統計上の数値である。6596人は、2022年2月に開始されたロシアによるウクライナ侵攻以降に、国連人権高等弁務官事務所（OHCHR）によってカウントされたウクライナ側の市民死者数を示している⁽¹⁾。他方で2383人は、2022年5月現在国土舘大学政経学部

籍している学生数を^②、61人は、シンポジウムが開催された日に足を運んでくれたであろう、筆者の授業の受講者数を表している。ここに示されているのはただの数字である。しかし、最後の61人が、毎週筆者の授業を受講しながら大学生活を日々楽しみ、友人関係に悩んだり喜んだりしているのとまったく同じように、6595人は全員それぞれ固有の物語を持ち、争いによる死を迎えるその日まで生きてきた市民である。

新聞やニュースを見ていると、「ウクライナ情勢」や「ウクライナ侵攻」といった特集が生まれ、毎日のようにさまざまな情報が公開される。そうした記事のなかには、戦禍の中で出産した女性の体験や従軍を決意した若者のインタビューなど、市民の姿を見つけることができる。しかし私たちがウクライナ侵攻の問題を考える際には、これを「ウクライナ」や「ロシア」といった国家という政治的アクター間の問題として捉え、多くの場合一人ひとりの市民に目を向けることはない。だが、実際に戦っているのは、それぞれ固有の物語と歴史を持った人間である。そしてその戦いのなかで今まさに死んでいっているのは、国家ではなく人間である。

本報告は、国際情勢に直接的な影響を与えている政治学上のアクター（国家や国際機関）とは異なる次元、すなわち、市民の視点からウクライナ侵攻やその延長線上にある問題を考えるための方法を探るものである。ここでは、そのヒントを古代ギリシアに求め、そこにおいて市民がいかにして戦争と向き合っていたのかを明らかにする。

1. 戦争と向き合う三つの方法

他国あるいは過去の戦争や争い、すなわち現在私たちが直面し、命の危険にさらされているわけではない争いに、私たちが市民として向き合うためには、いくつかの方法がある。その方法として、ここでは三つ考えてみよう。

(1) 情報に触れる

ひとつ目はその戦争や争いについての情報に触れる方法である。日々テレビや新聞、インターネットに公開されるニュースが伝えるのは、戦争や争いについての情報である。どちらの勢力がどの地域に侵攻したのか。その際にどのような戦略が練られていたのか。どのような兵器が用いられ、どれほどの兵士が死傷し、どれほどの市民がそれに巻き込まれたのか。その戦いについて、それぞれの陣営を率いている人々はどのような見解を表明し、それについて世界はどう反応しているのか。

日常生活の中で、ウクライナ侵攻について私たちが知るものは、ほとんどの場合こうした情報に基づいている。事実に基づいている、少なくとも、多くの人々によって事実・現実であるはずだと信じられている報道は、それが信じるに足るはずだという多くの人々の確信に支えられている。そうすることで情報は信憑性を獲得し、現場の状況として私たちのもとに届けられる。しかし、たとえば今回のウクライナ侵攻に伴うロシア側の死者数を調べようとしても、それを報道されている情報のうちに見いだすことは、非常に困難である。どの情報を流し、どの情報を流さないかという選択をそれぞれの陣営ができる限り、私たちが触れる情報の正確さは薄れてゆく。言論が封鎖されている場所で海外のメディアやジャーナリストが重要な役割を果たすのは、このためである。

(2) 体験談に触れる

二つ目の方法は、体験談に触れるという方法である。体験談といっても、そこにはさまざまな現れ方がある。筆者の祖父母は第二次世界大戦を経験した世代だったため、幼い頃には彼・彼女たちの生々しい体験を聞いた。もちろん、直接話を聞くことだけが体験談に触れる方法ではない。2014年のウクライナでの衝突後のインタビューが集められた、ユライ・ムラヴェツ Jr. 監督のドキュメンタリー映画『ウクライナから平和を叫ぶ』（2016年）は、ロシアとウクライナ両方の人々、市井の人々が、その争いをどう考えているかを淡々と描き出す。こうした個人による戦争についての語りは、学校の授業で習う戦争の

一部であると同時に、はまる場所を失ってしまった戦争という大きなパズルの一ピースのようでもある。一人ひとりの個人の体験についての語りや記録（これはしばしばインタビューという形式をとる）が担っているのは、膨大な情報によって構築された戦争という出来上がったパズル、あるいは「大文字の歴史」には似つかわしくない勝手に判断されて行き場を失った無数のピースの存在を世に知らせることである。取り残されたピースを通じて、私たちは戦争や争いというものが、本当は一人ひとりの人間に関わるものなのだとすることを、否応なく認識させられる。

体験談の別の形式には証言文学を数えることもできるだろう。このジャンルの最も有名な作品のひとつであり、ノーベル文学賞受賞作品でもある、スヴェトラナ・アレクシエーヴィチによる『戦争は女の顔をしていない』（1985年、増補版2004年）は、奇しくも今回のウクライナ問題を引き起こしたロシア（旧ソビエト連邦）の女性たちの戦争体験の声を集めたものである。同書の中で、彼女は自身の作品に関して次のように述べている [アレクシエーヴィチ 2016: 11-12]。

思い出話は歴史ではない、文学ではないと言われる。それは埃まみれのままの、芸術家の手によっては磨かれていない生の現実だ。語られた生の素材というだけ。[中略]まさにそこにこそ、まだ温もりの冷めぬ人間の声に、過去の生々しい再現にこそ、原初の喜びが隠されており、人間の生の癒しがたい悲劇性もむき出しになる。

アレクシエーヴィチが、従軍した女性たちの記憶にスポットライトを当てることによって明るみに出そうとするのは、出来上がってしまったパズルには不適合とされたたくさんのピースであり、『大文字の歴史』が取りこぼしてきたもの」である [沼野 2021: 28]。

(3) 創作・フィクション

三つ目の方法として考えられるのは、創作・フィクションである。この方法に含まれるものとしては、文学作品や小説、映画、劇作品、漫画、アニメなどを挙げるができる。ただし創作・フィクションと、二つ目の方法であった体験談の間の差異は、一般的に考えられているほど大きくはない。先ほど取り上げたアレクシエーヴィチの作品は「証言文学」と呼ばれるが、ほとんどの場合「文学」というジャンルに含まれるのは、創作やフィクションである。日本の戦争文学作品として今なお色褪せない大岡昇平の『野火』（1952年）は、作者自身の戦争体験に基づいて執筆されている。IS（イスラミック・ステート）によって家族を殺され、奪われた子どもを取り戻すために戦士となった女性たちと、彼女たち取材するジャーナリストの交流を描いたエヴァ・ユッソン監督の『バハールの涙』（2018年）は、ISによるヤズディ教徒襲撃事件（2014年）を題材として描かれている。

戦争に関わる創作・フィクションの多くは、実際に起こった・起こっている戦争や争いに基づいていることが多い。残存する最古の戦争文学である古代ギリシアの『イリアス』で描かれるトロイア戦争も、決定的証拠を欠くものの、架空の戦争ではないという見解が一般的である。他方で『イリアス』には、戦う人間と同時に多くの神々や半神の英雄が登場し、フィクションの要素も色濃い。創作やフィクションといっても、一括りにできないほどその形は多様である。しかしそれでもこの方法に含まれる形式は、いずれも同じ目的のために作られていると考えられる。すなわち、観客や読者に感情のレベルで戦争や争いを体験させるということである。ほんの一瞬でも自分であることを忘れさせ、その時代、その場所へと観客や読者を引き込むのである。

これら三つの方法のうち、自分が当事者とはなっていない戦争や争いを一番「体験」できるのはどの方法だろうか。シンポジウムで来場者に挙手をお願いしたところ、圧倒的に多くの人々が二つ目の「体験談に触れる」という方法を選択した。しかしここではあえて、別の方法、すなわち三つ目の創作・フィクションに焦点を合わせることによって、ウクライナ侵攻や他国の争いの問題に、

私たちが市民としてどのように向き合うことができるかという、本報告の問いにアプローチしてみたい。その中でも特に演劇という形式を取り上げ、この演劇を通じて戦争や争いに向き合った古代ギリシア人たちに注目してみよう。

2. 古代ギリシアにおける戦争、政治、演劇

今から 2500 年以上前の古代ギリシア世界では、戦争は今よりずっと人々に身近な存在だった。その第一の理由は、共同体のメンバーである市民が直接戦争に従事したという点にある。非戦時下では農民や職人である人々が、戦争が始まると、自前で準備した装備に身を包み戦地に赴いた。こうした人々は、「重装歩兵（ホプリテース）」と呼ばれる。彼らは青銅の兜をかぶり、木製で青銅の上張りをした盾と、長い突き槍と剣を持って戦った。彼らの戦い方は、「ファランクス」と呼ばれる密集部隊が作り出す陣形によるもので、この隊形で敵の部隊にぶつかった [サイドボトム 2006: 109-111]。

本報告で注目する紀元前 5 世紀の古代ギリシア世界では、大きな戦争が二つ起こっている。ペルシア戦争（前 499 ～前 448 年）とペロポネソス戦争（前 431 ～前 404 年）である。ペルシア戦争がギリシアの諸ポリス連合軍とペルシア帝国軍という、異なる民族の間の戦いだったのに対して、ペロポネソス戦争は、ギリシアのポリス・アテナイを中心とするデロス同盟軍と、同じくギリシアのポリスであるスパルタを中心とするペロポネソス同盟軍の間で繰り広げられた、同じ言葉を話す人々の間でのいわば内戦であった。古代ギリシア世界は、紀元前 5 世紀の大部分を戦争に費やした。しかし同時にこの時期は、同じギリシア世界、とりわけアテナイにおいて民主政が確立された時期でもある。

民主政（デモクラシー）という言葉が、デーモス（民衆）とクラトス（力、支配）というギリシア語から成り立っていることからわかるように、現代においてその価値が認められている民主政の起源は、古代ギリシアに見出すことができる。古代ギリシア世界の中でとりわけ栄華を極めたポリス・アテナイでは、紀元前 6 世紀末ごろから民主政の基盤が作られた。ソロンの改革は、それまで

の貴族支配に代わる政治の導入のきっかけとなった。クレイステネスの改革によって導入された十部族制は、都市部、沿岸部、内陸部に住む異なった利益を持つ市民たちに、ポリス全体の利益を考えさせる役割を果たした〔伊藤 2004: 186-194〕。その後、制度的にも確立した民主政は、たびたび衰退の危機に陥りながらも、約 180 年にわたって存続した。

古代アテナイの民主政は、現在の私たちになじみあるような間接民主政ではなく、直接民主政という形をとった。政治の運営は代議士に任されるのではなく、ポリスの市民である成年男子（両親、あるいは片方の親がアテナイ出身であるという条件付き）全員に任された。市民であれば、財産や家柄に関係なく参政権が与えられた。このような制度の中で最も重要な役割を果たしたのが、民会と呼ばれる最高議決機関であった。定足数が 6000 人程度だったと言われる民会には、毎回一万人前後の人々が、半円形の野外会場に集まったと推測される〔橋場 2016: 112-133〕。民会に出席する市民は単なる傍観者ではなく、自分や家族の命に関わるような、例えば戦争に関する決定に際して、拍手や野次によって自らの意志を表明し、決定を下した。

このような直接民主政のあり方を、哲学者プラトンは「劇場政治」と言って皮肉った〔プラトン 1993: 700e-701a〕。というのも、民会の会場は演劇が催される当時の劇場とよく似ており、政策決定の過程は、演劇の善し悪しを拍手や野次によって判断するその仕方とほとんど同じだったためである。こういう事情もあり、古代ギリシア人にとって演劇は、はじめから政治的な色を帯びていた。さらに、演劇の催しはポリスが主催する公共行事であり、選抜された一般市民も合唱隊として参加した。演劇競演会の審査員になるのはやはり一般市民であった。こうした演劇の成り立ちとアテナイのデモクラシーは切っても切り離せない関係にあった。観劇に足を運ぶ市民は、ほとんど「政治参加する市民」と同義であった〔Monoson 2000: 89〕。民主政の確立に大きな役割を果たした政治家ペリクレスは、市民が積極的に観劇に行くよう、観劇手当なるものを導入したほどだった〔澤田 2010: 114-115〕。

3. 戦争と喜劇

(1) 古代ギリシアの演劇

古代ギリシアにおける演劇は、現在の私たちがイメージするような演劇とはだいぶ異なる。前節で示した政治との密接な関わり、特にそれがポリスの公的行事だったという点は、大きな相違点のひとつである。この公的行事としての演劇は、悲劇の競演会として出発した。予選を通過した三人の悲劇作家が、それぞれ悲劇作品三篇と短い笑劇を一日に上演して、その出来を競うのである。競演会は三日間行われた。ペロポネソス戦争中は、悲劇と笑劇の後さらに喜劇が一篇上演された [丹下 2008: 13-14]。

アテナイの政治社会における悲劇の重要性は、これまで多くの論者によって強調されてきた。紀元前5世紀という戦争の時代において、ヘロドトスやトゥキュディデスといった状況の記録に専心した歴史家と異なり、悲劇作家たちは作品を通じて、市民が目にするができる場所で、自分たちが戦争に向き合うためのパースペクティヴを示した。彼らが生み出した作品の多くは、戦争や争いを扱っている。例えばアイスキュロスの『ペルシア人』は、ペルシア戦争を題材として、帝国ペルシアとは対照的に、ギリシア人・アテナイ人が自由な市民として、自由な政治社会に生きていることを市民の前に示した。悲劇が「市民の精神生活を映し出す鏡となった」 [丹下 2008: 16] というのは、まさにこのような理由による。

それでは、喜劇はどうだろうか。喜劇もまた悲劇と同様に、市民の前に、戦争に向き合うためのパースペクティヴを何らかの形で提供したのだろうか。これらの問いに取り組むために、ここからはアリストパネスという喜劇作家のひとつの作品に注目しよう。

紀元前5世紀半ばに生まれたアリストパネスは、現存するギリシア喜劇作品の大部分を生み出した喜劇作家である。ソクラテスをソフィストとして描き、ソフィストの詭弁を暴露した作品『雲』や、アイスキュロスとエウリピデスという大悲劇作家の批評と読める『蛙』などを生み出した彼は、しばしば平和主

義者とも形容され、「平和三部作」と呼ばれる作品も残している。ここで取り上げるのは、現在まで伝わる彼の完全な作品としては最も古い、『アカルナイの人々』である。

(2) アリストパネス『アカルナイの人々』

この作品が上演されたのは、ペロポネソス戦争開始から6年が経過した時期である。結果的に30年近くにわたって続いたことを考えてみれば、6年目の時点では戦争終結の様子など見られなかったであろう。アテナイ側は、開戦2年後に倒れた最高指揮者ペリクレスの戦術に従って籠城作戦を続けていた。この頃のアテナイ人たちは、戦いに疲弊しながらも、敵勢スパルタへの憎悪を募らせていたと考えられる〔野津 2008: 325-326〕。戦争推進のムードと敵勢への憎悪が社会に蔓延することは、戦時下では頻繁に起こることであるが、『アカルナイの人々』が上演された時期も、まさにそのような社会状況だった。

この作品の主人公は、ディカイオポリスという名の一人の農民である。ギリシア人であれば、この名前が「正しい」という意味を表す「ディカイオス」と、政治共同体を表す「ポリス（都市国家）」という二つの言葉から成り立っていることに容易に気づいたであろう。農民であり、同時にポリスの構成員の一人である彼は、何らかの「正しいポリス」に関心があるということが、この名づけから想像される。

作品の詳細に触れる余裕はないので、ここではそのあらすじをごく簡単に紹介するにとどめたい。舞台は、劇場に集っている観客が現実世界においてもまさに直面している、ペロポネソス戦争真っ只中のアカルナイという町である。ディカイオポリスは、他の一般市民と同様、戦争によって主に経済面で多くの苦しみを味わっている。それなのに、民会での議題をあらかじめ決定する役割を担うの評議会の議員たちは、「どうしたら平和が実現するかについては、何ひとつ考えてもくれやしない」（2627行）。そこでディカイオポリスは奇策に出る。敵国スパルタと関係を持つ人物に、「この私〔＝ディカイオポリス〕たった一人と、私の子供たちと妻だけのために、ラケダイモン人〔＝スパルタ人〕

たちとの間に平和条約を結んでおくれ」と依頼し（131-132行）、それを実現してしまうのである。ディカイオポリスによるこの勝手な行動に、アカルナイの老人たちは怒りの声を上げる。彼らの間で起こる衝突が、劇の後半では面白おかしく描写される。

（3）喜劇作家による平和の呼びかけ

『アカルナイの人々』に付されている古伝梗概は、この作品を「大変見事に作られた作品であり、あらゆる仕方で平和を呼びかける作品の1つ」と紹介している [アリストパネス 2008: 102]。ペロポネソス戦争の只中において、戦争推進に傾くポリスが主催する演劇の祭典で、喜劇作家アリストパネスは強い平和のメッセージを発するという大胆な行動に出たのである。そこには、ディカイオポリスの口を通じて語られる「喜劇といえども、正義の何たるかをわきまえている」という信念がある（500行）。

アリストパネスのメッセージが端的に表れているのは、農民ディカイオポリス（一般市民）と軍人政治家（エリート市民）の間で交わされるやりとりである。借りてきた乞食の衣装を身にまとったディカイオポリスに向かって、軍人政治家ラーマコスがお前は乞食か、それとも何者かと尋ねると、ディカイオポリスは次のように答える。

何者かですって？私は善良な市民です。スプーダルキデース〔「公職を漁る者」の意〕ではありません。この戦争が始まってからというもの、私はストラトーニデース〔「戦闘員の子」の意〕ですが、あなたはこの戦争が始まってから、ミスタルキデース〔「日当のもらえる公職を占める者」の意〕ではありませんか？（595-597行）

ギリシア人の名前のような響きを持たせた造語を使って相手を皮肉るこの台詞では、善良でありながら戦禍に苦しむ一般市民と、戦争によって金銭を得られる立場にあるエリート市民を対立的に描き出している。市民はすべて平等で

あるとされている民主的なポリスの中に、実はこうした対立があるということ鮮明にすることによって、作者は、「善良な普通の市民たちが、戦争によって利益を享受する一部のエリート市民たちによって騙されている」ということ、そして「戦争継続する限り、一部のエリート市民たちによって利益と喜びが独占され、多くの普通の市民たちからはそれらが奪われている」ということを示そうとしている [野津 2008: 328]。

アリストパネスのメッセージは、シンプルでありながら、市民一人ひとりに対して十分説得力を持つ。もしあなたが、この戦いによって金銭を得たり、豪華な食事にあずかることができないのであれば、エリート市民と一緒にこの戦いを推し進める理由をあなたは持っていないはずだ。この戦いによってもし不利益を被っているなら、あなただっただけこのディカイオポリスのように、自分と自分の家族だけは助かりたいと思わないのだろうか。こうした喜劇作家の声が聞こえてくるだろう。

自己利益ではなく社会全体の利益を考えよという風潮は、古代ギリシアのみならず、戦時中において今なお頻繁に用いられる弁舌である。ペロポネソス戦争初期の最高指揮官ペリクレスは、「人間は自分自身では栄えていても、祖国が滅亡すれば一緒に滅びる」ゆえ、「ポリスを防衛するのは全員の義務」と言って、戦う市民たちを鼓舞した [トゥキュディデス 2000: 202]。歴史家トゥキュディデスが記録したペリクレスの葬送演説は、アテナイ民主政の理想を謳う名演説として、今なお語り継がれている。そこで強調されるのは、個としてではなく、共同体としての幸福の重視である [トゥキュディデス 2000: 181-191]。アリストパネスは、こうした輝かしいアテナイ民主政の精神的基盤に正面から挑戦し、観客である市民はその考え方に一定程度が賛意を示したようである（この作品は、上演された年に優勝している）。アテナイ民主政の強さは、戦争で発揮されたというよりはむしろ、戦時下にあっても、当時の政治的風潮に真っ向から対立し、ポリスの方針を厳しく非難する作品を公の場で披露することを許容した懐の広さであり、それを受け入れることが可能だった人々の市民としての自覚だったのかもしれない。

おわりに

戦争や争いに向き合う方法としての創作・フィクションは、ニュースの報道や生の体験談に比べると、当事者ではない私たちに、その争いの悲惨さを伝えるには不十分かもしれない。一部だけが切り取られ、誇張され、美化された物語は、当の戦争や争いと切り離して考えるべきだという見方も存在するだろう。しかしながら創作・フィクションこそ、観客や読者をその登場人物へ感情移入させ、感情のレベルで戦争や戦いを最も体験させることができるというのもまた事実である。創作・フィクションは人々に、「あなたがその場に置かれていたら、いったいどう感じるか」という問題を直接的に突きつけてくる。それに対して人々は時に恐怖し、悲しみ、怒り、ときとして笑い、そう反応した自分自身と向き合うことで初めて、自身が当事者ではない戦争や争いを「情報」とは異なるものとして理解できるようになる。そこで働かせられる想像力こそ、争いにピリオドを打つための最強の武器である。

注

- (1) Statista, “Number of civilian casualties in Ukraine during Russia’s invasion verified by OHCHR as of November 20, 2022”.
- (2) 国士館大学「学生データ」<https://www.kokushikan.ac.jp/disclosure/information/students/>.

参考文献

- アリストパネス（野津寛訳）「アカルナイの人々」『ギリシア喜劇全集 1』所収、岩波書店、2008年
- アレクシエーヴィチ、スヴェトラーナ（三浦みどり訳）『戦争は女の顔をしていない』岩波書店、2016年
- 伊藤貞夫『古代ギリシアの歴史』講談社、2004年
- サイドボトム、ハリー（吉村忠典、澤田典子訳）『ギリシャ・ローマの戦争』岩波書店、2006年

- 澤田典子『アテネ民主政——命をかけた八人の政治家』講談社，2010 年
- 丹下和彦『ギリシア悲劇』中央公論新社，2008 年
- トゥキディデス（藤縄謙三訳）『歴史 1』京都大学学術出版会，2000 年
- 沼野恭子『100 分 de 名著 アレクシエーヴィチ「戦争は女の顔をしていない」』NHK 出版，2021 年
- 野津寛「『アカルナイの人々』解説」『ギリシア喜劇全集 1』所収，岩波書店，2008 年
- 橋場弦『民主主義の源流——古代アテネの実験』講談社，2016 年
- プラトン（森進一，池田美恵，加来彰俊訳）『法律（上）』岩波書店，1993 年
- Hall, F. W. and W. M. Geldart (eds.). *Aristophanis Comoediae*, vol. 2. Oxford: Clarendon Press, 1907
- Monson, Susan Sara. 2000. *Plato's Democratic Dntanglements: Athenian Politics and the Practice of Philosophy*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- 国士舘大学「学生データ」<https://www.kokushikan.ac.jp/disclosure/information/students/> (2022 年 11 月 23 日最終アクセス)
- Statista, “Number of civilian casualties in Ukraine during Russia’s invasion verified by OHCHR as of November 20, 2022” <https://www.statista.com/statistics/1293492/ukraine-war-casualties/> (2022 年 11 月 23 日最終アクセス)